

文化祭での集団体験を通じた人間関係能力の変化に関する研究

専攻 人間発達教育専攻
コース 学校心理・発達健康教育
学籍番号 M11035K
氏名 萩原 菜穂美

【問題と目的】

いじめや不登校、校内暴力などの学校教育問題の背景には、家庭や地域社会における集団体験の減少に伴う人間関係能力の低下がある(國分,1995)。高校生についても人間関係を自らの手で広げ深める力が不足していることが見受けられる。これらの問題が幼少期からの集団体験の少なさに起因するならば、改めて集団活動を体験させ、人間関係能力を身に付けさせることが、現代社会における重要な課題であると言えよう。

学校行事の1つである文化祭のクラス活動では、普段の友人関係を超えてクラス全体で協同作業をすることが求められる。それまではほとんど会話も交わしたことがなかったような生徒同士が自分たちで揉め事を解決する過程や対人的な経験をすることになる。このような経験を通じて、生徒は狭い人間関係を抜け出して身近な他者であるクラスメートと新しい関係性を持つようになり、更には、クラスメートを超えた他者全般との関係性に対する認識をも変化させていくのではないだろうか。教師はそのような学校行事の意義を理解し、学校生活の中でどのように組み込んでいくかを十分に考慮することで、生徒の人間関係能力を促進することが可能になると考えられる。

そこで、本研究では文化祭でのクラス活動に焦点を当て、様々な活動の中での体験を通して高校生の人間関係能力がどのように変化するかを量的(調査①)及び質的(調査②)に明らかにすることを目的とする。

調査①

【方法】

高校3年生253名を対象に、クラスメートとの関係性尺度(高井,1999)、一般的な他者理解尺度(青木,2011)、ク

ラス活動個人過程尺度(平山,1993)で構成された質問紙調査を実施した。調査は文化祭準備開始前、文化祭準備期間中、文化祭後の3回実施した。クラス活動個人過程尺度は文化祭のクラス活動中に生徒がどのような体験をしているかを包括的に捉えるためのものである。

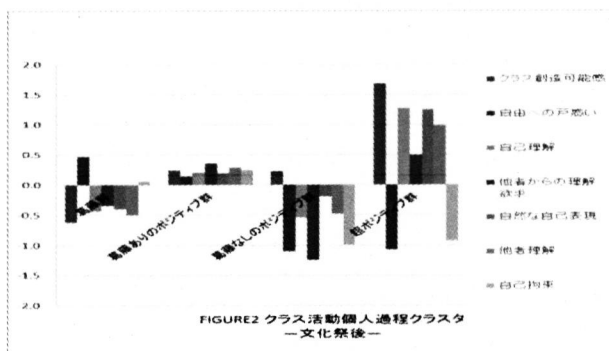
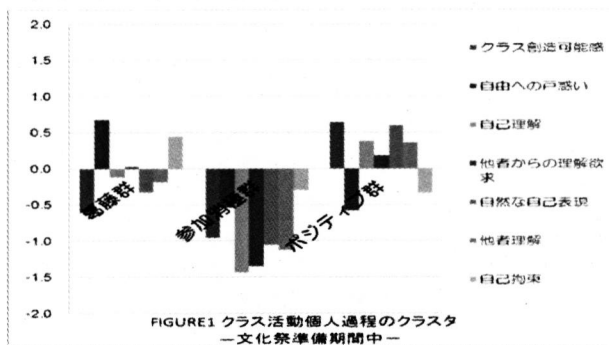
【結果と考察】

1.各尺度の因子分析 各尺度に対して主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。クラスメートとの関係性尺度では「クラスメートとの積極的な関わり」「クラスメートとの防衛的な関わり」の2因子が抽出された。また、一般的な他者理解尺度では「他者理解欲求」「現状の他者理解度」「他者受容度」の3因子が抽出された。クラス活動個人過程尺度では「クラス創造可能感」「自由への戸惑い」「自己理解」「他者からの理解欲求」「自然な自己表現」「他者理解」「自己拘束」の7因子が抽出された。抽出された各尺度の下位尺度の全てにおいて内的一貫性が確認された。

2.クラスメートとの関係性と一般的な他者理解、クラス活動個人過程の時期による変化 クラスメートとの関係性尺度と一般的な他者理解尺度の各下位尺度について、時期ごとの平均点を用いて分散分析を行った結果、「クラスメートとの積極的な関わり」「他者理解欲求」で時期の主効果が認められた。「クラスメートとの積極的な関わり」は文化祭準備開始前よりも準備期間中と文化祭後で有意に高得点であり、「他者理解欲求」は有意に低得点であった。準備期間中と文化祭後に測定したクラス活動個人過程尺度については、「クラス創造可能感」「自然な自己表現」「他者理解」において、準備期間中よりも文化祭後の方が有意に高得点となった。これらのことから、生徒は文化祭のクラス活動の中でクラスメートとの積極的な関

わりを高めていたが、その体験が一般的な他者理解を変化させるまでには至っていないことが明らかになった。

3. クラス活動個人過程に関するクラスタ分析 文化祭のクラス活動における生徒の体験を捉えるために、クラス活動個人過程尺度の下位尺度因子得点を用いてクラスタ分析(Ward法)を行った結果、文化祭準備期間中は3つ、文化祭後は4つのクラスタが抽出された(FIGURE1,2)。準備期間中のクラスタは『葛藤群』『参加消極群』『ポジティブ群』、文化祭後のクラスタは『葛藤群』『葛藤ありのポジティブ群』『葛藤なしのポジティブ群』『超ポジティブ群』と命名した。クラスタの解釈から、文化祭のクラス活動での体験を通じ、生徒の多くはクラスメートとの交流を広げ、達成感を得ていることが明らかになった。



4. クラス活動中の体験がクラスメートとの関係性および一般的な他者理解に与える影響 『参加消極群』は『ポジティブ群』よりも「クラスメートとの積極的な関わり」と「現状の他者理解度」が有意に低得点であった。文化祭のクラス活動で『ポジティブ群』は「自然な自己表現」によってクラスメートとコミュニケーションを取り、「他者理解」や「自己理解」を深め、「クラスメートとの積極的な関わり」を持つことができたと考えられる。一方、『参加消極群』は文化祭準備期間中にクラスメートと関わる機会があったにも関わらず、何もできていなかったため、「積極的な関わり」や「現状の他者理解度」に関しても、

因子得点が減少方向に変化したと考えられる。さらに、文化祭後のクラスタと準備開始前から文化祭後にかけての変化では『葛藤群』が『超ポジティブ群』よりも「クラスメートとの積極的な関わり」と「他者理解欲求」が有意に低得点であった。これは『葛藤群』が『超ポジティブ群』とは正反対に近い体験をしていたことが影響していると考えられる。『葛藤群』は「自由への戸惑い」や「自己拘束」を感じ、クラスメートと「自然な自己表現」を交わすことができず、「クラス創造可能感」も感じられなかった。一方、『超ポジティブ群』は文化祭のクラス活動の中で「自由への戸惑い」や「自己拘束」を感じることなく、クラスメートと「自然な自己表現」をし、「自己理解」「他者理解」を深め、「クラス創造可能感」を増大させた。多くのクラスメートと関わる機会を同じように得ていながら、体験には大きな差があった『超ポジティブ群』と『葛藤群』では「クラスメートとの積極的な関わり」や「他者理解欲求」についても隔たりが生じたと言えよう。

調査②

【方法】

高校を卒業して1年目の男女6名の協力者に対してPAC分析を実施した。PAC分析とは、当該テーマに関する自由連想、連想項目の類似度評定によるクラスタ分析、本人によるクラスタの解釈、調査者による総合的解釈を通じ、個人ごとにイメージ構想を分析する方法である(内藤, 2003)。教示は「高校3年生の文化祭のクラス活動でのクラスメートとの関わりで、どのような体験が思い出されますか。」であった。

【結果と考察】

協力者は文化祭のクラス活動において一人一人固有の体験をしていたが、体験から1年以上を経た時点では全員が文化祭のクラス活動を「良い経験」だと捉えていた。クラス活動の中で、「友人関係が崩れかけた」という体験をしていた協力者も、「それがあったからこそ仲が深まった」と語っていた。協力者の語りに基づいて、文化祭に代表される学校行事の高校生にとっての意義が考察された。

主任指導教員 小林 小夜子
指導教員 秋光 恵子